場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

第161号
2021年12月

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行(記録：安藤彰浩、編集：中川健史)(主宰：吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

第161回例会　2021.11.11

《総選挙はどう仕組まれ、その結果は？》

「総選挙の結果には多くの人ががっかりしていました。だが、「平和のつどい」の金平さんの講演などで、元気を取り戻したように思われます。歴史は螺旋的に展開します。明日を見つめて前へ歩みたいものです。」

問題提起　吉田千秋（主宰）

・衆院選の選挙開票報道はあまりにも面白くなかったので、早めに就寝し、翌朝、結果だけ新聞で確かめました。選挙戦が始まる前は、野党の共闘が日本の政治を変える様な結果をもたらすか、という期待もありましたが、結局、自民党は少し議席を減らしたものの、絶対安定多数を獲得して、コロナ禍で動揺したかに見えた自民党支配を再び確実なものにすることに成功しました。加えて、問題は、維新の会が西欧のメディアが伝えているように、自民党以上にナショナリズムの傾向の強い右派ポピュリズムで、この政党を加えて、改憲勢力が3分の2以上になったことです。

・問題は、何故こういう結果になったということです。先日、“2021ぎふ平和のつどい”に講演した金平茂紀氏は、自民党の勝因は、一つには安倍氏や菅氏が悪過ぎたために、岸田政権の誕生が良く見えたこと、もう一つは、コロナ禍で人々は疲れ果て、政権交代の様な不確かな選択ではなく、安定を求めたことにある、という見方をされていました。

・日本では政治イコール選挙であると考える人が多い様です。だが、国民が生活に密着した要求を掲げて始める社会運動こそが本当は政治の出発点なのです。日本の多くの政党はこうした社会運動とのつながりがありません。各政党は社会運動と結びついて、そのエネルギーを政治に活かす必要があると思われます。。

・政治は国民が、本当に重要だと考えていることの実現に取り組むものでなければなりません。選挙当日、「最も重視した政策は何か」を尋ねた年代別の出口調査の結果を見れば、国民の求めるものが何かは明確です。環境、気候変動の問題に対する関心が低いことは意外でしたが、世代間に多少の違いが認められるにせよ、共通の関心は、コロナ対策や景気対策、また子育て及び教育政策、社会保障の充実、格差是正や貧困対策など生活に密接した問題にあります。

・憲法問題を重視したと答えた人の割合は、どの世代を見てもわずか。今回の選挙で全く争点になっていない憲法改正が新しい国会の重要な審議テーマとなることに違和感を禁じ得ません。今日は、選挙の結果を踏まえて、今後の日本のあり方について、意見交換できればと思います。

意見交流

＊“市民連合”とは、どんなグループなのか。

＊市民連合は、平和、立憲主義の尊重する人たちが中心になって、安倍氏による平和憲法の破壊や議会軽視を批判して、立憲民主党や共産党や社民党などの野党共闘の実現を目指して活動してきた。

＊総選挙は自民党が絶対安定多数を獲得した。言い換えれば、立憲民主党を中心とした野党勢力は惨敗した。何を選択する選挙なのか、争点が何なのか、さいごまではっきりしなかった。メディアが果たすべき役割を演じていないことも、自民党圧勝の大きな要因である。

＊人々は選挙の際、本当に各政党の政見、選挙公約などをしっかり比較検討した上で、投票しているだろうか。多くの人は地縁血縁など地域の人の繋がりを前提として、同じ政党に票を投じているだけではないか。自民党とは正にそういう政党で、様々な地元の業界、団体の利益の代弁者で、地域経済のネットワークに乗っかっているから強い。

＊日本社会は高齢化し、若者はますます少数派となって行く。社会全体に変革するパワーが欠けている。企業も弱体化し技術革新するエネルギーが無くなりつつある。

＊住民票を移していない学生が多い。大学に出向いて、学生に不在者投票の呼び掛けをしたり、手続きの仕方を教えたりして、関心があっても投票しない者を減らす努力が大切である。

＊不在者投票を増やしても、選挙結果を変えることはないだろう。日本の政治の問題はそういう所にある訳ではない。政治や社会の問題を考えることをすっかり政治家に任せる今の政治のあり方に限界を感じる。

＊岐阜大学が政治問題に対する意識の高い教師や学生が沢山いて、意見を交換する機会があって、学生にとって好い場所だった。

＊多くの若者は政治的にほとんど無思想でなかなか議論ができない。それでも対話は大切である。こちらから一方的にまくし立てるのではなく、7割方話を聞く側に待って、粘り強く機会を作る様にしなければならない。

＊今、憲法が危ない。しっかり意思表示をする必要があるが、息子たちは選挙に行っていない。家には、投票所の入場券が使われないで、置かれたままになっている。少なくとも投票することが政治参加の第一歩である。

＊自民党が大勝すると予想していた。憲法改正の動きに危機感を覚える。自民党を支持し続ける日本人の国民性に疑問を持った。自民党政権に評価することのできるどんな実績があったのか。

＊選挙前、芸能人が投票を呼び掛ける訴えをしたことが印象に残っている。

＊今回の選挙結果は自民党が支持されたというよりも、立憲民主党が支持されなかったと理解することができる。よい政治を実現するためには我々一人一人が話し合いを通じて意見形成をしていかなければならない。

＊政治が変わって欲しいから、自民党には投票しなかった。社会を変えるために教育が果たす役割は大きい。残念なことに、興味を喚起する個性的な教師がいなくなった。

＊周りの若者は大抵何事にも向上心を持って取り組もうとしている。政治に対しても決して無関心ではない。ただ時間を掛けて取り組む意欲が欠けている。

＊政治の現状に対する責任は最終的には国民にある。政治が悪ければ、それは国民の誤った判断の結果に過ぎない。誰かにそう決めろと強いられた訳ではない。しかし周りの大人がしっかり考える力を養う環境を作って上げることが重要である。全てはそこから始まる。

意見交流の最後に　吉田千秋

・自民党の勝利に終わった選挙の後、日本社会はどう変わって行くのでしょうか。日米同盟が強化され、軍事力強化が更に進められようとしています。それも民主主義の下での国民の選択の結果で、責任は国民自身にあるという意見もあります。日本は元々保守的な社会なのだという意見があります。しかし人々の考え方は教育やマスコミの影響を反映したものであることを忘れない様にする必要があります。

・戦後の民主教育の方針転換が行われ、60年代以降、政治が学校から排除され国民教育から国家教育への後戻りが進められました。政治は教育現場でタブーとなり、教師が政治を論ずることも、生徒が政治に関わることも認められなくなりました。近年、投票権の年齢引き下げなどもあって、学校における政治教育の必要が認識され、政治に関する授業が行われるようになりました。しかし、いまだ「教育の中立性」の名の下で、政治教育はしっかり行われてきませんでした。

・労働組合の中にも、自民党こそが雇用の擁護者であると見なす人たちが少なくありません。かつて労働組合のメンバーは単なる賃上げ運動の枠を越えて積極的に社会運動を展開していました。現在の労働組合の多くは完全に骨抜きにされていて、組合が政治活動に参加することは、残念ながら少数です。

・選挙制度の問題もあって、得票数がかなり増加しても、議席獲得につながる訳ではありません。環境保護の取り組みなど市民レベルでは多くの人が活動しています。しかしそれが大きな政治運動に発展することはありませんでした。生活の次元と政治の次元をどう結び付けるかが今後の大きな課題です。

・選挙イコール政治ではありません。主権者の政治的行動は今のところ投票で終わってしまっています。日本人の民主主義はお任せ民主主義だと言われます。市民レベルでは様々な活動が展開されています。それを政治の議論に発展させることが課題となります。来月はまた今回の議論を引き継ぐかたち日本の政治や社会全般について考える機会にしたいと思います。

例会感想、便り、意見など

○＜文化で闘う＞

今回の総選挙で初めて、支持政党ではない、野党統一候補の名を書いた。もちろん、これが最善の方法であると頭では理解していても、いざ行動となると正直、精神的にきつかった。例会に参加して、希望の萌芽は確実にあるんだ、と皆さんのお話から勇気をもらいました。

笠木透さんたちが始めた憲法フォークジャンボリーにも参加していたフォークシンガー、「よしだよしこ」さんのライブに行きました。場所は付知町の『鼓土里座』（土着民のこさえた小屋）です。社会の状況に静かにプロテストする唄の数々。アンコール前のラストソングは、マララさんやグレダさんを讃えつつ、若者のしなやかな感性に希望がある、と　とても前向きで元気の出る「良い知らせ」という唄でした。

笠木さんが常に言っていた『文化で闘う』の意味を考え続けています。　（Adati）

○＜若者が希望を持てる未来を＞

先の選挙の結果は残念だった、という他ない。政権交代を願ってのことだが、野党共闘しなかったらもっと悲惨な結果だったことは否めない。

私は、あれこれ忙しく家のこともしながらやっていて、大事なことを見失っていたのではと、自省している。人との繋がりが疎遠になっている現在であるが、生きるとは「人と人との繋がり」と思うようになった。共生とか、個性・多様性を認め合うとかをよく言われるようになったが、言葉だけのものになっていないか。今になって、人は夫々みんな違っていることと、命のはかなさを身に染みて実感している。

憲法についてやさしく教えてくれている『憲法と君たち』（佐藤功著）を今一度、手に取り、生活全般を見渡し、見直したい。中学・高校生、そして私たち高齢者も。憲法を学んで暮らしに生かせる政治を求めていきたい。これから成人される若者の未来が少しでも明るい、希望に満ちたものでありますように願って！選挙はその一歩である。　（hirasumi）

○＜“公助・共助・自助”、“自己責任自己責任の否定”＞

自己責任の語がどこにどのように使用されるかに

よって意味が違ってくる。特定の事象に対して自己責任論を否定するのは当然の場合がある。しかし、自己責任論への批判は事象から離れてその語が浮遊する。多くの場合、若者たちは向上心と、道からはずれないよう自己責任を持って生きている。その人たちには自己責任の否定は容認できない。私自身についても個人として当然自己責任を持っている。

（アダム・スミス）

○＜求められる21世紀の「問答法」＞

今回の衆議院選挙で、若者の政治離れと保守化が一層進んでいることが判明した。30％台～40％台の投票率や世論調査でのこの世代の自民党支持率や維新支持率の高さがそれを物語っている。大学生が自治会運動をしなくなったとか、政治を論じない傾向が指摘されて久しい。昨今では「コミ障」という言葉が若者の間で使われているとの話も耳にした。政治を語ることを憚らない若者が身近にいたりすると、仲間内のコミュニケーションを遮る「わきまえのない奴」という意味として、それが使われるのだそうだ。悲しい話だ。

これに関して、古代アテネの民主制の中で陶片追放にあって毒杯を仰ぐ羽目になったソクラテスの逸話がフト思い出された。かの御仁は街角に立って若者などに論議を吹っ掛け、彼らの主張の論拠を問い、より深い思慮に導く「問答」を実践したのだと、後に弁明したとある。それを新しい知を生む「産婆術」とも言った。

政治議論を好まない今の若者に、大学の門前に立ってモノを言い、彼らを政治議論に引き込もうと考えるのは時代錯誤だとは思うが、彼らの間や世代を超えて社会問題を楽に論議できる場や仕組みが切

望される。それは楽市楽座のキャンパス版・市民広場版というイメージとなろうが、市民が変わっていけるプロセスを描けないと、この民主主義の閉塞状態は破れない。　（フィリピン・ウオッチャー）

○＜日本人の劣化と日本からの逃亡＞

今回の選挙の結果は、おおむね日本国および日本人の劣化を表現するものだと思います。理由は長くなるのでここでは書きません。ただ選挙期間中にあれっと感じたことがあったので述べます。

それは真子結婚報道で、国民の関心を選挙からそらすために、どうでもいいことをこの時期に権力側はぶつけてきたなと思ってました。ただ最後の記者会見での発言にはおおっと思いました。こう発言しました。「今、心を守りながら生きることに困難を感じている方【自分も含めて】が、たくさんいらっしゃると思います。周囲の人のあたたかい助けや支えによって、より多くの人が心を大切に守りながら生きている社会になることを心から願っています。」

これは明らかに現在の日本社会に対する批判であり、推測すると、「日本がそんな社会になるのはしばらく無理だから、私たちはアメリカに逃げます。日本の皆様さようなら」というのが本音じゃないでしょうか。この発言を私は支持しますし、日本の劣化度を示しているとも感じました。（タナカ）

＜京都だより　その8＞　「阪急電車の「特別」」

京都・大阪・神戸をつなぐ阪急電鉄。全国の大手私鉄でトップのブランドイメージを持たれ続けています。（日本生産性本部「顧客満足度調査」、09年の調査開始から12年連続トップ）

関西では、住みたい街ベスト10の半数と上位の常は阪急沿線とのこと（リクルート調べ）。西宮北口・夙川（ｼｭｸｶﾞﾜ）・甲陽園、『細雪』（谷崎潤一郎）の姉妹が住む芦屋、岡本等、いわゆる「高級住宅地」が並びます。

阪急は、既存の都市・住宅地を結ぶという考え方とは逆に、「需要を創り出す」という考えの下、田園地帯に鉄道を敷き（1910年開業）、次々と住宅地を開発・販売し成功してきました（「関西私鉄　先頭走るブランド戦略　1位阪急、沿線開発の先駆け」（21.11.17朝日新聞）」）。宝塚歌劇場も持っています。

開業当初から、鉄道車両には珍しい暗い色（マルーン色（小豆色））の外装、壁・床は木目、座席はアンゴラヤギを使ったゴールデンオリーブ色（緑色系）の内装で通しており、「高級感」を感じさせるようです。

沿線の住宅地建設と販売に携わった社員が、「（阪急電車とともにという）沿線に住む人の人生と思い出を創る」という戦略を語っていました。以前、その新聞記事を読み、企業に操られる人生というものを感じ、嫌な気持ちを持ったのを覚えています。

鉄道は公共性が高く、運賃も自由競争に任せず規制されています。どの公共交通も等しくその地域の公共に貢献しているのに、阪急沿線に住む人は、高級なイメージを持つ阪急ブランドに特別な感情や満足感を持ち、そうでない人は阪急沿線に住むことに憧れる。企業が創り出すイメージとブランド、同じ鉄道で持たれる「特別感」。人の自尊心をくすぐり、意図的に差を設ける。

公共交通は、私達の「移動の権利」を保障するものとしてあり、利用者を増やすための高級感等といったイメージは実質的な優秀さを示すものではないはず。安全が何よりのサービスであり、そこに消費者としての目を向けるべきでしょう。

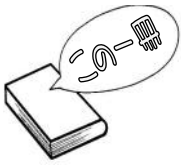
（hiro）

＜世界一周貧乏旅　その24＞　「北のアイルランド」

　僕はタバコを吸わないしお酒もそんなに飲まないのですが、コーヒーだけは毎日飲まないと気が済まないほどに大好きで、そろそろカフェイン依存症の検査をした方がいいかもなぁなんて思っています。
これまでにありとあらゆる産地やら焙煎時間やら精製処理方法やら、様々なコーヒーを試してきたのですが、外国で試したコーヒーといえば、アルメニアで飲んだアルメニアン・コーヒーは今だにその味を覚えています。
アルメニアの首都エレヴァンを散策中、ふとコーヒーが飲みたくなってオープンテラスのカフェへ入りました。2014年のサッカーワールドカップ真っ最中だったため、軒先の立て看板には今晩の対戦表が書かれていました。本当みんなサッカー好きですよね。サッカーは世界中で人気があるけれど、さらに多くの世界中の人間がコーヒーを飲んでいるはずなのだから、立て看板にはコーヒーのメニューでも書くべきですよ、まったく。
さて、アルメニアで飲むコーヒーはアルメニアンコーヒーと呼ばれますが、それはいわゆるトルココーヒーのことです。トルココーヒーとはコーヒーの淹れ方の一つで、日本でよく見るようなエスプレッソや、砕いたコーヒー豆をフィルター越しに抽出するフィルターコーヒーではなく、細かく挽いた粉状の豆を水と一緒に小さな手鍋へ入れ、それを煮立たせて上澄みを飲むというコーヒーです。

恐らく外交上仲良くないためか、名前にはアルメニアとついているものの、それはトルココーヒーとほとんど同じです。強いていえば、このカフェで飲んだアルメニアン(トルコ)コーヒーは、りんごのような果実の甘い香りがして果物のシロップでも入っているんじゃないかと思うほど、フルーティーな甘い味がしてとても美味しかったです。フィルターで濾過しないためカップの底には泥状のコーヒー粉が残り、知らずに最後までぐいと飲み切ろうとしてゲホゲホむせたりしました。
僕が当たり前に飲んできたコーヒーは、他の国々でも当たり前に飲まれていて、最後まで飲み切るのが普通なコーヒーもあれば、最後まで飲めるわけないコーヒーだぞ、という当たり前の前提に様々な違いがあることを感じました。
最近コーヒー豆が値上がりしてつらいところですが、当たり前が凝り固まらないように今後もいろいろなコーヒーを試していきたいと思っています。

（カモノハシタニ）



和田静香著　『時給はいつも最低賃金、これって私のせいですか？国会議員に聞いてみた』左右社、2021年

　ライターの和田静香さんが、この国の気になることを時には喧嘩腰になりながら直球で聞いてくれます。彼女はライター業をしながら、生活のためにアルバイトをしています。変わらない世の中に怒りながら。
　お相手は、衆院選で自民党の平井氏を破り、さらに立憲民主党代表選挙立候補で話題の小川淳也さんです。立憲のプリンスとも呼ばれる小川さんを推したいのではありません。施政者が、一市民とこんな風に対話してくれたら必ず政治は変わるだろう。と思うわけです。
　今の日本は、あまりにも政治と暮らしが遠いです。東京オリンピックだけを取り出してみても、世論とかけ離れた結果だったじゃないですか。でも、ただ国会議員の話を有り難がって聞くのではなく、この本のようにガチンコで話せ

たなら。この国をどうすれば今よりマシに出来るか、国の寿命を延ばすにはどうすれば良いか、政治家が民をリスペクトして話を聞いてくれたら、きっと変わる。夢みたいですが、ちょっと希望を抱ける気がしました。

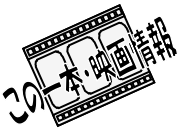
国債、移民、米軍基地の問題まで。かなり読みごたえアリです。Peace!!

（渡邉佳織）

菅野静枝著　『私の非戦行脚』学習の友社、2021年9月

菅野さんが数奇なめぐりあわせで広田弘毅（元首相、A戦犯）の孫と結婚するが、その夫が3年後に死去し1周忌の日から「私の知らない『戦争』を知りたい」と「非戦行脚」を始め、全国669の自治体、105人の学校長などとの面談の様子を静かに綴った記録である。まずは著者のもの凄い行動力に恐れ入ります。この様な方を見たことも聞いたこともありません。しかし何も無理やりに「非戦」の立場に面談者を誘うのではなく、「非戦」の重要性を改めて痛感した。最近の国際環境の変化に伴い、再軍備（憲法改正）をも肯定する傾向が見られる中で、「戦争は忍び足でそっとやってくるのだ」ということと、「軍備が平和をつくらないこと」を改めて再認識する一冊になるだろう。

先の戦争を肯定したり、侵略戦争であった事実を否定したりする声が段々大きくなっている今だからこそ本書は貴重な面談記録である。　（井口）



ザイダ・バリルート監督『TOVE（トーベ）』2020年、フィンランド・スウェーデン

『ムーミン』の作者トーベ・ヤンソンの前半生を描いた映画をみた。隣国スウェーデンの作家で何かと比較されることの多い（と私は思っている）リンドグレーンは、第2次大戦中反ナチスの立場で活動していたが、ほぼ同時代を生きたトーベはどうだったのかに興味があったからだ。

期待は良い意味で裏切られた。第2次大戦でフィンランドはドイツ側についた。有名な彫刻家だった彼女の父親も親ナチスだったようだが、彼女がヒトラー風刺作品を描いたことも紹介され、その面では期待通りだった。

裏切られたトーベ像というのは、どこか浮世離れしたムーミンの世界と違って、もがき苦しみながらも自分の道を貫こうとする自立した強い人間だったことだ。

画家を目指しながら父親から認められない青春期の葛藤、家族との関係、芸術家仲間との交流、世間からも認められないことからの苦悩などなど、トーベが時には周囲とぶつかりながら、自分の道を切り開く姿に心を動かされた。その中には、当時は犯罪だった同性のパートナーとの「結婚」もある。それらが彼女の作品にも反映されていることも知った。ムーミンを読み直さなくては。

トーベの翻訳者だった冨原眞弓さんが彼女について、夏は孤島でパートナーと二人で暮らし、人と群れることが嫌いな「気難しい人」だが、若い人を育てることにも熱心な人、というようなことを書いていた。この映画を見てそれがよくわかった。蛇足だが、トーベが乗り移ったかのようなアルマ・ポウスティの演技も素晴らしかった。実は、私はトーベ・ヤンソンを知らなかった！　（井川敏郎）

2021年後半 哲学カフェ、第26期の予定

例会は19:00～21:00です。

会場は、 ふれあいスペースです。コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。

第163回例会 1月13日（木）	**「世の中を明るくするには何が必要か？」** ＊新年の展望を語り合う
第164回例会 2月10日（木）	みなさんでテーマを決めていきます。 希望するテーマなどもお寄せください。
第165回例会 3月10日（木）	
第166回例会 4月14日（木）	
第162回例会 12月9日（木）	**「日本社会を変えたいのか、変えたくないのか？」** ＊この1年を振り返って改めて考えてみると、考えさせることがいろいろあった。 この社会の何を変えたいのか、変えなくてもよいのか、そこを探ってみたい。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!

http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェdeぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わいわいがやがや アラカルト

★今回の衆議員選挙の結果に落胆したのは私ばかりではないと思う。どうしてこんな結果になったのか、理解に苦しむ。「野党共闘」の成果を期待していたのだが、不発だった。

★しかし、失敗だったとは言い切れない。現実に政権与党の自民党も議席を減らし、「大物」議員も落選した事実がある。ある地区では、「革新的連携野党」が勝った事実もある。「野党共闘」が実現していなかったならば、もっとひどい結果になっていたことは間違いない。

★それを思えば「1歩後退2歩前進」と受けとめるべきではないかと思う。そして「野党共闘」の強みをさらに伸ばしていく方策を考えていきたいものである。それにしても、開いた口がふさがらないのは、野党の仮面をかぶった、「極右的」維新の会の躍進ぶりである。

★この勢力は、今後自民党政権の「憲法改悪」に拍車をかけることになろう。きわめて忌むべき存在である。ヨーロッパ諸国においても、生活苦に苦しむ人々が「極右」政党に走っていることが報じられているだけに、日本もそのような気運に覆われ始めたような気がする。

★日本の国民もコロナ禍で疲弊している。このような状況下では、現実の社会的問題を論理的に考え、知性と理性で困難を乗り越えようとするのではなく、情動に押し流された、思考停止に陥る危険がある。

★「リーダーシップ」を演出する権力者の威勢の良い掛け声、「構造改革」だの「新自由主義」だの、そして岸田政権の「新資本主義」だのと、さらに騙され続けていくのであろうか。

★結局、今回の選挙で強く思うことは、よりよい社会を作るための政治を語る文化が存在しないことである。政治が日常生活と結びついていない。政治家を育てるための文化的土壌条件もほとんどないことは、大きな欠陥であろう。

（島田幹夫）